

幼児教育・保育者の質を保証するカリキュラムの開発を目指す実践 — 養成課程1年目に身につけるべき能力について考える —

白幡 久美子¹⁾・鈴木 恒一¹⁾・岡田 泰子¹⁾・Dalrymple 規子¹⁾

Practice for Developing a Curriculum which Reflect the Quality Required by Kindergarten Teachers — Thinking about Competencies which First Year Students should Learn —

Kumiko SHIRAHATA, Tsunekazu SUZUKI, Yasuko OKADA,
and Noriko DALRYMPLE

本短期大学では、2年間で幼稚園教諭と保育士資格を授与している。幼稚園実習、保育資格関係の実習も含め多様な専門科目の単位取得が必要である。学生を社会に送り出すには、カリキュラムの構成とその実践に多くの工夫を要するのである。独自性を出しにくいカリキュラムの中で、2年間を通して配置している「基礎ゼミナール」と「専門ゼミナール」に、幼児教育学科としての特徴を出して、社会貢献のできる幼児教育・保育者を輩出したい。

今回は「基礎ゼミナール」の1年間の内容を整理して現状をまとめた。そして、それぞれの実践での課題として①入学前教育の改善、②書く力の育成プログラムの構築、③新入生研修の内容の見直し、④見学実習後の学びの分かち合いの必要性、⑤あそびの汎用の重要性などが挙げられた。今後、「基礎ゼミナール」の実践をより効率よくすすめ、幼児教育・保育を担う者として身につけるべき基礎的な能力を検証する事に繋げたい。

キーワード：基礎ゼミナール、あそびすと、はじめの一步

1. はじめに

短期大学課程2年間で、幼稚園教諭養成課程と保育士資格取得課程を設置している学科における授業科目の配列は、必修科目が大半となる事が否めない。必修科目が大半を占める中で、少しでも独自性を打ち出した教育をすること、幼児教育・保育の現場で即戦力として活躍できることを念頭に教育課程を編成している。

2年間を通じて少人数で受講することとなる「基礎ゼミナール」と「専門ゼミナール」では、あそびの実践を核としながら、その体験を価値化できる保育者の育成に努力している。

1年次に開講する「基礎ゼミナール」では、活動

の中心に“あそびすと”養成をおいている。五感を刺激するあそびを学生自ら体験し追究していく過程で、あそびの持つ価値を実感し、あそびのために必要となる技を身につけ、その価値を高めていく方法を理解する。そして、体験的に学んだあそびを、保育園や幼稚園の実習の機会や、ボランティア活動の際に繰り返し実践していく。活動の反復により、乳幼児との関わり方に抵抗感をなくしていくことができるのである。

さらに振り返りレポートの作成により学びを可視化する。学生自身はもちろん、学生と教員、学生同士が実践から得た学びを共有し、より高次の学びへと移行していくのである。

1年次に身につけた幼児教育・保育者としての基

1) 短期大学部幼児教育学科

礎力を、2年次には「乳幼児保育」「障がい児保育」「子ども家庭支援」の3つの専門コースに分かれて、ゼミナール教員と学生たちが協同して、あそびの実践計画を作成する。各ゼミナールが地域の保育関係機関と連携し、あそびの実践を繰り返すことで、その提案の仕方を工夫していくことが可能になる。学生自身はもちろん、学生と教員、学生同士が学びから得たものを共有し、さらなる学びへと導いていくのである。つまり、企画→課題の共有→実践→省察(振り返り)→新たな企画を繰り返すことにより、学生達は知識・技術のみならずコミュニケーション力も高めていくことができるのだ。

このように、2年後にはあそびを子どもたちに実感させることのできる保育者として巣立つことができるよう、各教員が学生生活の支援をしていく。幼稚園や保育園の現場では、即戦力として活躍できる事が期待されている。それらに応えることのできる保育者養成に尽力している。

今、地域の子育てや教育環境が大きく変化し、多くの不安や困難が生じている。これからの時代を担う幼い子どもたちが健やかに育つ環境を保障できるのは保育者である。また、保護者の安心・安全の子育ての課題に応えるためにも、保育者に大きな期待が寄せられている。

「基礎ゼミナール」は4名の教員により共同で企画・実践されている。本論では、その現状を報告すると共に、それぞれの活動の課題を述べていくこととする。

(白幡)

2. 入学までに培う幼児教育・保育への芽生え —はじめの一步—

(1) 入学前教育の目的

入学試験は、初秋から翌年3月まで、様々な形態で実施される。約半年間の入学者選抜時期を経て、本学科への入学者が決まる。

早く進路が決定している者は、合格してから半年後に幼児教育学科に入学することになる。もちろん、高校3年次の後半の学びは大切にしたい。しかし、進学先決定後も幼児教育・保育の学びに対して学習意欲を持続させていくことが困難な場合も多々ある。

そこで本学科では、保育者養成校への進学意識の高揚と、入学時に幼児教育・保育への関心の芽生えを促すプログラムを提案している。また、多様な分野で学んできた者が、幼児教育・保育を共通に学ぶために、幼児教育・保育に関する時事についても理解して臨んでほしいという期待から入学前教育を実施している。

(2) 入学前教育としてのワークノートの内容

「はじめの一步—わたしの夢を叶えるために—」と題して20頁のワークノートを合格者全員に郵送している。ワークノートは入学式後のオリエンテーションで回収して、ゼミナールの担当教員が学習内容を確認している。

表紙(図-1)は、自分の目標設定を絵で表現してもらおう。つまり、2年後の自らの理想像をそこに描き出すのである。この課題で自らの目的意識を確認している。大半の学生が、子どもと保育者である自分を描いている。



(図-1) 表紙の絵 (2017年度入学生Aさん提供)

課題は、次の5つからなっている。

「課題1 目標・夢シートをつくらう、課題2 絵本を紹介しよう、課題3 子どもの福祉や保育に関する新聞記事をまとめよう、課題4 生活実習に取り組もう、課題5 音楽で子どもの世界を知ろう」

課題1:「目標・夢シート」では、表紙に絵で描いた自己の将来像をもう一度振り返り文章化していく形式をとっている。課題2から課題5は保育に関する基礎技術への導入、保育という仕事への関心をそそる課題、大学生活の準備としての課題を提案している。

課題2：「絵本を紹介しよう」では、乳幼児の世界を回想し、好感を持つ絵本に出会うこともある。とくに自分自身が幼児期に読んでもらったことのある絵本には興味を持つようである。読後その内容をまとめる事で、言語表現力をつけることにも繋がる。

絵本は、幼児期には毎日幼稚園や保育園で扱われる教材であるから、知見を広げていくとよい。さらに読書にあまり関心を持ってこなかった人でも絵本を読むことは短時間で完結するので、充足感を得やすいのである。

課題3：保育に関する話題に関心を持ち、自らの職業への責任感、統制力、克己心などを育成する。幼児教育・保育者の現状の立場に対し、将来、どのような姿勢で臨んでいくのかは各自の問題である。保育を仕事とするにはどのような利点があるのか、逆にどのような不利な点があるのかも理解できる。

この課題によって、幼児教育・保育に携わる意欲を一層強くし、保育への理想も確実にしてほしいという願いが込められている。

課題4：幼児教育・保育は子どもの生活を保障するものである。子どもの権利を保障する立場に立つ者が自分の生活をまず、確立できることが必要である。自分の生活を振り返ることにより、家庭の仕事を効率化する工夫を生まれるのである。心身ともに健康ということは衣食住の充足から始まるのである。学生生活においても是非確保したい。

課題5：乳幼児との生活から音楽は切り離すことができない。保育者に要求される音楽的素養は非常に高い。例えば、季節のうたの伴奏、行事のピアノ演奏、朝の歌、帰りの歌、給食の歌など毎日の園生活で歌うための伴奏が必要である。おおよそ年齢にふさわしい歌を子どもと楽しむことも保育者には必要である。

5つの課題には、幼児教育・保育の基礎が凝縮してあるといっても過言ではない。保育者養成の2年間は非常に過密なスケジュールで教育課程の修得が進む。そのため入学前から準備を怠らず自己の能力を開花させることに邁進していくことが、2年後の理想の自分へと繋がる。入学者達は、毎年このワークノート在完成させて入学式に臨んでいる。

(3) ワークノートの限界と課題

ワークノートの入学後の提出は、ほぼ完璧である。入学前に課題について真摯に取り組んだあとがみられる入学生が大半である。

とくに前述の「課題4：自己の生活の振り返り」では、家事参加や食生活を見直している。学生生活を良好にするための基本である寝食の問題点を発見し、自己解決している学生も多くみられる。入学前に健全な学生生活に対する意識を確実にするために有効な課題である。

今後は、入学予定者の中に一方的な自己学習形式のワークノートへの取組に対して、意欲の面で大きく差が出てくることも配慮したい。たとえば、ワークノートを入学予定者に郵送した後、一定期間を経て高校在籍中に大学へ持参してもらう日を設定し、質問に答えていくというような方法も検討するべきであろう。入学後の学生生活で日々接することとなる幼児教育学科の教員と入学前から接する事で、大学への親近感を持ち、効率的な準備学習ができる事を期待したい。

(白幡)

3. 入学直後の新入生研修で培う協調性

幼児教育学科では、新入生が入学間もない時期に1日研修を実施している。この新入生研修の展開について述べる。

(1) 目的について

- ① 新しい教育環境に慣れ、学科の学生としての自覚を持つ。そのために、教員や学生間、特にゼミナールの仲間とのふれあいの機会とする。さらに、企画立案から運営において、学生の主体的な参加を重視することで、アクティブラーニングを構築する。
- ② 2年間の学習継続や専門性の習得に向けた土台作りとしての「はじめの一步」とする。そのために、短大生としての集団行動、マナー、コミュニケーション力等の必要性を学ぶ場とする。
- ③ 保育に関する関心を持ち、地域における子育てを理解する。そのために、地域連携の郡上市を訪問し、地域での子育てや家庭生活の特徴を知り、学生各々の出身地域への関心を喚起する。

(2) 日程と実施場所について

【研修日程】

| 時間 | 内 容 | |
|-------------|---|---|
| 9:10 | 短大発 (スクールバス乗り場) | |
| 10:00 | 郡上市八幡防災センター 到着 | |
| 10:10 | 講話 (郡上市の子育て支援について) | |
| | 10:10~10:55 講話 | |
| | 10:55~11:10 質疑応答 | |
| 11:10 | 終了 | |
| 11:20 | 郡上市八幡防災センター 発 | |
| 11:45 | 古今伝授の里 到着 | |
| 11:50~12:40 | ランチ (マナー) 白幡ゼミナール・鈴木ゼミナール | 11:50~12:50 ゼミナール交流会 岡田ゼミナール：篠脇山荘 Dalrymple ゼミナール：和歌文学館ラウンジ |
| 13:00~14:00 | ゼミナール交流会 白幡ゼミナール：篠脇山荘 鈴木ゼミナール：和歌文学館ラウンジ | 13:10~14:00 ランチ (マナー) 岡田ゼミナール・Dalrymple ゼミナール |
| 14:15~15:00 | 合同レクリエーション・解散式 (晴天時：東氏館跡庭園・雨天時：篠脇山荘) | |
| 15:20 | 集合 (バスのりば) | |
| 15:30 | 古今伝授の里発 | |
| 16:30 | 短大着 (スクールバス乗り場) | |

対象者：2017年度 幼児教育学科1年生 (102名)

実施時期：2017年4月19日 (水)

実施場所：岐阜県郡上市八幡防災センター、古今伝授の里フィールドミュージアム

また、新入生研修の事前指導として、基礎ゼミナールの中で、「新入生研修事前学習」を、新入生合同により実施する。主な学習内容は、①新入生研修の概要説明 (しおりの配布) ②郡上市についての概要説明 (本学との連携協定) ③事務手続きに関する確認 (保護者からの同意書、食物アレルギー調査書提出、諸費用徴収に関する説明)

(3) 主なプログラムについて

① 行きのバス内では、「学歌」や「はじめの一步」

を斉唱する。またレクリエーションを楽しむ。また、ゼミナール長、副ゼミナール長には事前に各ゼミナールのプラカードの制作、移動の誘導、バスの座席表確認など、業務を担当。

- ② 八幡防災センターにて、郡上市の子育て支援についての講話、質疑応答を行う。
- ③ 古今伝授の里でのゼミ交流会では、自己紹介、委員選出、新しい学生生活に向けての抱負など、交流を行う。
- ④ 事前学習では洋食マナーに関する講習を行い、洋食を食べる際に大人として身につけておきたい外食時の立ち振る舞いや約束事を確認する。



②郡上市子育て支援についての講話



③ゼミ交流会

また、研修後の事後指導では、①郡上市の子育て支援についての講話を聴いて、「地元就職をすることの意味について」また、「郡上市が子育て支援において特に力を入れていること」についてレポートを課した。

新入生にとり、4月は新しい環境に自分自身を適応させていくスタートの時期である。学外での新入生研修は、解放感とともに、集団生活の一員として、新しい仲間との出会いの喜びを共有する機会となり、これから始まる新しい学生生活の、より良い第一歩を築く成果をあげた。保育者を目指す学生にとり、保育の職場も常にチームワークが重要となる。その点においても、協調性を培う場を持てる新入生研修は意義あるものとする。

(4) 今後の課題

今後の課題として、2点挙げられる。

1点目は、日帰りプログラム内容の中で、昼食時間の占める割合が高いことである。これは、学生数の関係で、二回転せざるを得ない現状が原因となっている。そのため、午後のプログラムの組み方の時間配分に影響を及ぼすことが毎年課題となっている。

2点目として、学生自ら主体的に動く学びが、時間的に限定されるプログラムになっている点である。大学生活のスタートとして、現状より、更に積極的に学生らが企画、運営し、より学生同士の交流が深まるプログラムの再検討が課題である。

これらを踏まえて、来年度以降、学科としての見直しが必要であるとする。

(岡田)

4. 保育関係機関の見学実習

本学には、附属保育機関として、「桐が丘幼稚園」「附属幼稚園」「常磐保育園」「岩野田児童センター」、

そして子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」を設置している。関市をはじめ岐阜市等近隣の地域における幼児教育、地域の子育て支援に尽力してきた。本学では、6月にこれらの施設との協力体制により、保育者へのはじめの一歩として、基礎ゼミナール毎に見学実習を実施している。対象施設は「常磐保育園」「岩野田児童センター」「ラ・ルーラ」である。

特に本学は、岐阜県唯一、児童館厚生二級指導員資格を取得できる大学として、児童館の見学実習も積極的に取り入れている。この見学実習の意義及びその展開について述べる。

(1) 見学実習事前学習について

見学実習の事前指導として基礎ゼミナールの中で「見学実習事前学習」を新入生合同により実施する。主な学習内容は、①見学実習の意義 ②3施設についての説明 ③見学実習の流れ ④見学実習に対する心構えや準備等について担当教員より説明を行い、知識を得る。

特に①見学実習の意義では、次のような事項を重視している。

- *実際の保育現場に直接触れることにより、その重要性を知る。
- *各々の保育現場の先生方からの説明を通して、各施設の社会的役割について理解する。
- *出会った子ども達やその保護者との関りを通して、楽しさや大切さを感じる。
- *保育者を目指す学生自身が今後の課題について気付く。

また、事前に【見学実習ワークシート】により、各施設における目標を作成。そして事後には、振り返りを行い、心に残ったエピソードや目標に対する達成度などを明らかにし、後期から始まる実習に結びついていくよう配慮している。

常磐保育園



岐阜市上土居

岩野田児童センター



岐阜市粟野東

ラ・ルーラ(子ども家庭支援センター)



各務原キャンパス内

【見学実習ワークシート】の内容について

*見学実習に行く前に

1. 今回の見学実習において、自分の目標を立てましょう。できるだけ、具体的に書きましょう。

*見学実習に行って・・・

2. 実習先で、心に残ったエピソードを一つ書いてみましょう。
3. 1で立てた目標について、自分はどの程度達成することができたでしょうか。具体的に書いてみましょう。
4. 見学実習に行って、分かったことを書きましょう。

(2) 常磐保育園における見学実習

常磐保育園においては、午前中約2時間の予定で実施している。園長先生による保育所の機能や役割についての講話をはじめ、新入生がグループに分かれ、0歳から6歳児の各クラスに入り、直接に子ども達と関わることでできる貴重な機会である。その中には、初めてかかわる学生も少なくなく、緊張しながら言葉がけや手あそび、絵本の読み聞かせなど様々な働きかけを行い、その働きかけに対して子どもも反応を通して、様々な気づきをしながら子どもを理解することの重要性を学んでいくのである。

(3) 岩野田児童センターにおける見学実習

岩野田児童センターにおいては午前中約2時間の予定で実施している。センター長先生による児童館についての講話をはじめ、幼児クラブへの参加を通して指導員による主活動や学生による手あそびを親子で楽しむ中で、学生が子どもはもとより保護者ともかかわる機会となり、その大切さを肌で感じる機会となるのである。また、この見学実習を通して、児童センターの受け入れ対象児が18歳以下の児童であることを初めて知る学生も多い。

(4) ラ・ルーラにおける見学実習

ラ・ルーラにおいては、午前中約1時間30分の予定で実施している。本学各務原キャンパス内に設置し、地域の子育て家庭の支援に取り組んでいる。担当保育者からの講話をはじめ、学生が地域の子ども

とその保護者と直接かかわる機会となり、地域における子育て支援の現状を知り、その大切さと現代社会における子育て家庭の支援の重要性に気付く機会となるのである。また事業内容について「親子の居場所の提供」をはじめ「子育て相談」等多岐に渡ることを知る機会となる。

【ラ・ルーラの事業内容】

- *親子の居場所の提供
- *親子で楽しく遊び学ぶプログラムの提供
- *子育ての相談に応じる場
- *学生が実体験をとおして学ぶ場
- *次代における子育て・家庭支援の先駆的なあり方を模索する場
- *保育者の交流と研修の場

(5) 今後の課題

今後の見学実習による教育効果を高めるため、以下の課題の実施が必要であると考えます。

*幼稚園における見学実習の実施

各施設の機能や役割などについて理解を深めるためには、幼稚園における見学実習も必要である。

*【見学実習事前ワークシート】の作成

見学実習の教育効果をより高めるため、グループワークにより事前に各施設の機能や役割などを、様々な方法を駆使して調査を行い、ワークシートを作成する。

*事後学習『振り返りとわかちあい』の実施

【見学実習事前ワークシート】及び【見学実習振り返りワークシート】の2つのワークシートを活用し、グループによる振り返りと分かち合いを行ったうえで、基礎ゼミ全体により、発表会などを通して分かち合いを行い、さらに理解を深める。

しかし、「基礎ゼミナール」の目標である“あそびすと”養成においては、現時点では時間的な制約が大きく、上記の課題の実施は困難である。今後も目標達成のため、より効果的なカリキュラムの検討を行っていきたい。

(鈴木)

5. 書く力の育成

(1) 保育者にとってなぜ書く力が必要なのか

幼稚園教諭、保育士、いずれの職業を選ぶにせよ、保育者は日々保護者との連絡を密に行う必要がある。教育・保育の対象年齢が低ければ低いほど、保護者と保育者との情報交換は緊密に行わなければならない。連絡の手段となるのは、日々保護者と保育者との間で交わされる「連絡ノート」であり、自筆で書くことが大半である。しかも、子どもたちの保育に携わる傍ら、午睡などの時間を利用して担当の子ども一人ひとりについて、記述する必要がある。

子どもの生活は連続しているので、集団保育の場での生活と家庭生活がなめらかに接続するために、保護者と保育者の「連絡ノート」による情報交換は欠かすことができない。もし両者の場での生活に大きな隔たりがあれば、子どもの生活自立が遅れてしまう事もある。子どもの生活を中心にまわりの大人は、生活の一貫性を保障する必要がある。

このようなことから、保育者養成課程で学ぶ者にとって、正しく文書伝達をする事は必要な条件であるといえよう。われわれは、相手に正確に伝える文章を書くことを基本に、学生達の文章作成力の育成に取り組んでいる。

(2) 書く力の育成を目指した講座の開設

まず、入学直後に国語力のテストを実施する。このテストは、幼児教育・保育で頻繁に用いられる漢字の書き取りを60問、想像力や発想力に関する問題を6問、そしてテーマに関する作文という構成である。実施時間は50分間である。入学生の高校卒業までに培われている能力を確認するために実施しているのであって、このテストにより順位付けをすることはしない。本学在籍期間の2年間で、どれほどの文書作成力がついたかを見極めるためのスタート段階での能力を把握するために実施している。

正しい日本語を使う事も重要である。また、話し言葉と書き言葉を区別することにも細心の注意を払う必要がある。このような事を日常的に注意していくことが、養成課程で身につけてほしい事柄でもある。

そこで、2017年度より文書作成能力の基礎を身につけるための講座を、基礎ゼミナールの2コマを利

用して開催した。特別講師にご指導をお願いして2講座を十数名ずつのアクティブラーニングで開催した。

第1回目の講座ではとくに間違いやすい漢字表記、尊敬語を確認した。そして一人1題目を与えられ、それぞれの題目について分かりやすく説明する事をゲーム形式で実施した。

たとえば題目は「オリンピック」「政治」「愛」など様々である。与えられた題目について、説明文を作成して、10数名の仲間に題目を当ててもらうのである。自分が理解していることを相手に正しく伝えることの難しさ、工夫の必要性を学んだ。

2回目の講座では第1回の「読み手ファースト」を念頭に置き、より分かりやすい文章を書くための技法を学んだ。文章構成のうち、①結論優先フォーマット②列挙フォーマット③物語の3つのパターンについて学習した。3つのフォーマットのうち、一つを選択して文章作成することを試みた。

情報手段が多義にわたる今日、読むことに事欠かなくとも、一般に書くことのできない漢字が多くあるのは当然のことである。学生達は自分自身の記述する能力の現状を認識する事ができた。2回の講座は、学生を奮起させるように進められた。そのため、多くの学生が大学での実践的な学びに意欲を喚起された。

(3) 今後の課題

学習としての記述力の上達が、レポート作成や実習記録の作成に反映するまでには、時間と反復学習が必要となる。大学教育のあらゆる機会に、学生自身が自らの作成した文章構成を推敲して、考察を繰り返し完成させていくことを習慣化させる必要がある。このような学び方をどのようにして筋道を作るかが今後の課題である。基礎ゼミナールに限定して指導する事を超えている課題である。

(白幡)

6. あそびの発見とあそびの創造

(1) あそびとは

幼児教育学科では、保育者として必要な基礎力の一つとして「あそび力」を掲げて、保育者養成に取り組んでいる。私たちはあそび力を「保育者自身が

あそびを好み、進んでこれを展開でき、子どもたちにあそびを誘発することができる能力」と定義している(中部学院大学短期大学部幼児教育学科編集委員会編 2012)。では、そもそもあそびとは何であろうか。津守(1999)は、「同じように『遊ぶ』ということばが使われていても、本気になって遊んで、心から満足しているときと、子ども自身に何の感動もないときとある」と指摘し、子どもが本気になって遊べる状態をつくり出すことが保育者にとって必要であると主張している。学生たちは、入学時から子どもにとってあそびが大切なものであることは、なんとなく掴んではいる。しかし、乳幼児が目をキラキラ輝かせながらホースから出る水のしぶきを見ていたり、あるいは真剣に泥を丸めて団子を作っていたりする、その奥にある心の体験が何なのか。その琴線に触れるには、ずいぶんと遠い昔のことになってしまっていることであろう。彼らが保育者になった時に、そのあそびそのものの価値とその深さを理解する上で、このあそびを自ら体験していくことは次の述べる「あそびすと」としての活動が非常に重要なものとなると考えている。

(2) “あそびすと” とは

幼児教育学科では、あそびすとを①子どもと遊ぶことが大好きであること、②五感を育む自然の中でのあそびの大切さを理解していること、③やさしい笑顔とやさしい言葉で、さまざまな子どもやご家族に寄り添い、支援することができること、この3つの項目を兼ね備えたあそびのスペシャリストのことと定義をしている。そして、あそびすととして活動するためには、次の3つのレベルの力を身につけていけるようになることが必要だと考えている。その3つとは、①子どものあそびに面白さを見出し、②子どもとともにあそびを創造でき、③子どもをあそびへ誘うことができる、ということである。

(3) 5つのあそびから、総合的なあそびへ

本学科では、「あそびすと養成講座」を2010年度から開始した。はじめの5年間は、「自然あそび」「科学あそび」「認知あそび」「造形あそび」「音楽あそび」の5つのあそびを展開した。これらのあそびは、次第に「シャボン玉あそび」「カプラあそび」等に集約されてきた。その際、学生たちが徐々にあ

そびの形にとらわれ、現代の子どもと同じように、学生たちの主体性や創造性がどこまで育まれているかが疑問に思われるようになった。そこで、2016年度より、一度この枠を外し、もう一度あそびを発見し、創造していく学生の姿を育てるにはどうしたらよいか、ということに視点をあてることとした。2016年度は、「素材を究める」をテーマに、特に「紙で遊ぼう」とした。また、今年度は「迷路を舞台に何をする？」に基づき、指導を外部講師に依頼している。

(4) 学生たちがあそびを発見し、創造する過程

—外部講師による折り紙講座・ワークショップ—
では、実際にそれぞれの講師による「あそびすと養成講座」では、学生はどのようなことを学んでいるのだろうか。

講師より、折り紙での活動は、「折って作ったからおしまいではなく、それを使ったあそびや、さらに変化させることこそが最も大切」であることが学生たちに伝えられた。講師の作品を通して、折り紙の可能性や面白さに触れるとともに、2016年度では、馬やカラスを折ってみたり、コマを折って回して遊んだり、2017年度では、パンダ、ひまわり、雨傘などを折り、動きを楽しんだり、自分自身のあそびの引き出しをいくつも増やしていった。学生たちは、折り紙の作品は、折ること自体の楽しさと、飾る目的以外に、自分で工夫してあそぶこと、人とのコミュニケーションツールになることなどを実感していた。

ワークショップでは、2016年度は、学生たちが身体を自由に動かしながら、自分自身を解放させていくワークを行い、より自由に身体も心も動けるような体験をした。また、「素材を究める」というテーマの下、様々な紙を使って、それを具体的にはどのように使うかを体験し、さらにそれらを使って寸劇をグループで創って発表するなかで、紙という素材の可能性や、その素材を使う時の子どもたちのワクワク感を実際に体験し、創造力を大いに使って、協働で作業する楽しさを体験した。2017年度は、本学大学祭「たのしみん祭」において、本学科が地域の子どもたちにあそびを提供するために展開する「わくわくあそびむら」の“本番”に向けて、まるで舞台を創っていくような過程を学生全員で体験する流れの中で、2016年度同様、創造性と可能性を広げ深

めていく「あそびすと養成講座」となっている。また、これらの活動後に、他の活動同様、振り返りシートを書き、自分たちの活動を見直し、課題を見つけられるようにしている。

(5) 自分たちの成果発表の場—たのしみん祭わくわくあそびむら

2016年度は、「紙で遊ぼう」のテーマの下、折り紙でスイミーをたくさん作り、50周年を形にするものや、紙と科学のコラボとしての「紙コップを使ったぐるぐるへびさん」、紙と科学のコラボ、紙と空気で楽しめる紙コップお化け、「あそびすと養成講座」で作成したコマ・飛行機を実際に子どもたちと楽しむなど、学生たちがワークショップを生かしながら、子どもとやりたいことを出し合って、それぞれのブースを実施した。子どもたちが理解しやすいように、作り方の手順のポスターを作り、実際に一緒にやる際には、やさしく丁寧にやりとりをし、一緒に遊ぶ楽しさと指導する充実感を体験していた。あそびすとの第一歩を踏み出す活動である。こちらにも、終了後に、振り返りシートを書いて、達成したこと、今後の課題を一人ずつ見つめるようになっていく。

(6) 今後の課題

昨今、入学してくる学生たち自身が、あそびも含め様々な体験が少ないことが多い。彼らが、自分たちもあそびを発見し、創造する力を身につけ、そのような体験を子どもたちにも提供できる保育者に育

てることが私たちの使命である。ついつい、私たち教員自身がこのカリキュラムの中に固まってしまうがちであるので、昨年度から始めた上記の活動を発展させながら、学生たちの創造力を引き出し、広げ、深めていけるようにさらに考えていく必要があると考えている。また、ここで学んだことを、柔軟に応用ができ、あそびの引き出しを広げていけるようにしていけるように学生たちを導いていくことも課題である。

(Dalrymple)

7. おわりに

本報告は、2017年度の「基礎ゼミナール」の進行途中の現状報告と、それぞれの実施した活動により打ち出された課題をまとめるに留まらざるを得ない。

後半期の本ゼミナール活動では、学生達の体験中心の活動から、言語化してレポートにまとめて可視化していく活動に中心を移していく。この過程で「書く力」の講座で基礎として学んだ文章構成力と基本の文章作成法が駆使されるよう導く必要があらう。

基礎として学んだことを経験だけで終始させないことが大切である。つまり、すべての学びにおいて活用できるようになるまで繰り返し指導することにより、幼児教育・保育者としての基礎的な能力が身につくのである。

(白幡)